犬と触れ合い命の大切さ学ぶ

東京・大田区立馬込第二小学校　民間団体が体験授業

犬のことを知って仲良くなるコツをつかもう―。小学校教育の中で子どもたちが動物に触れる機会を広げようと、東京都大田区立馬込第二小学校で11月19日、民間団体による授業があった。2年生が犬との触れ合いを通して「思いやり」や「命の大切さ」を学んだ。

同校の多目的室にやってきたのは、ウェルシュ・コーギーやゴールデンレトリバーなど大小さまざまな5頭の「学習介在犬」。児童は犬たちと出合う直前、模型や時計の教材で、犬から見た人の手の大きさや犬が人の7倍の速さで生きていることなどを学習した。

各グループで一人ずつ、握った手を犬の鼻へ近づける「あいさつ」をしてから、目や鼻、肉球を観察。犬に付き添うハンドラーに相談しながら楽しく遊べる方法を考え、どうしたら犬と仲良くなれるか遊びを通して学んだ。

授業の最後に、児童たちは犬と仲良くなれた理由について、「優しくしてあげたから」「怖がらせないように考えたから」と答えた。

この授業は、一般社団法人マナーニ（東京・港区）が小学校低学年を対象に展開している「こども笑顔のライフプロジェクト」の一環。平成26年度から昨年度までに、全国の国公私立小学校89校で実施し、6千500人を超える児童が参加している。

犬の目や鼻を観察する児童たち

代表理事の内田友賀さんは「犬は古代から人と共に生活し、飼い主と意思疎通が図りやすい。海外の小学校では犬がクラスにいることで子どもの暴言や暴力が少なくなった例がある。犬との触れ合いは子どもたちの心に大きな影響を与えてくれる」と語る。

ただ、授業の実施に当たっては、児童の保護者にアレルギーの有無や犬への恐怖心についてアンケートを取る。該当する児童は赤白帽子を着けて授業に参加してもらい、スタッフや教員が識別できるようにしている。

同法人が考案した「動物介在学習プログラム」では、生活科の授業で犬との触れ合い体験を行った後、各校で道徳の時間を使い、教員に振り返り学習を実施してもらう。東京学芸大学との共同研究により、低学年で学習効果が高いことが分かっている。

プログラム開発主務で授業の講師も務める須﨑大さんは「触れ合い体験や授業中の発言を通して、子どもたちに動物とコミュニケーションを取る楽しさや動物に優しく接する大切さへの気付きを引き出したい」と話す。